拾遺和歌集第一

春

平ちさのあんらの家の奇合のよろこび　壬生忠岑

春ごとにいとのたえまなくみすれども　心も乱れて咲かんとぞ思ふ

兼平法師中務の宮の屏風の奇　紀友雄

春霞たなびくやまのさくら花　あかぬ色とぞ人は見るらん

さくらの花の盛りに　山高み人の見ぬ所にさくら花

冷泉院東宮おはしましける時奇　源重之

おほぞらにあくがれにしこころ　おほぞらにあくがれにしこころ

[illegible]

延宝比時月次屏風に　素性法師

[illegible]

天暦比時奇合に　源順

[illegible]

部　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天暦十年三月廿九日内裏歌合に　平兼盛

我宿の梅のなかめしてみよとみくるひとのそでもにほひぬるかな

[illegible]

中納言敦忠　中務

うくひすのなくこえにはさそはれぬ　大使家持

[illegible]

部

梅花をれるをみれば　柿本人丸

延宝比時宮旨の[illegible]

梅の枝をおりかざしてる白雪はたちまちにあるかな

日内の時屏風に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平かまくり

きさらぎの

我ちはの梅のたちばなやとつんぬしの郎まつ海もそ
そつまし

無流のはつ屏風

まとしあしの雅ちやん梅ちはのやまの風かして
そしてのよ位ちりけるお無流屏風

ゆくまつ

白梅のいろく衣よ梅ちはもとまとそろかつる
たつしして

人九

あまちかくかくあつまると片岩の郎の名今日燒める
恒佐ちはの嘉の屏風

ゆくまつ

野ちへこれいろあつてちはもこうはのまつまあ
ちに

ちろふちとは俗して

多勝流は製

まこ日野とよおはく武年いろこつ
たいしく

大体家持

まこの野ちよのさろこちろのつ
おはちさふの名よ有やこ今まれ
時たいこの春門のおまこ今まれ
おまこちろ名紫よ岩の巻ちひろ有
日つろ海ちろ

月ちれを正月ちろの

松のよ名く岩の野をとこ海ちは
鶯ちくまと

たくまれ

松の日する野まこふ松のありちはの名世のよ色よ仏のとひ
入ちは武アはのこのよ日しはちろ名よ

ゐ年まで限りなき松もなかりしかへ家代へ
延喜の時の屏風のよくのほとりの梅のちれる
たるゑ　　大中臣能宣
梅の花まさに散りぬるかの山の底に積もる雪と見るべし
たいしらさと　　よるべんしらさ
咲たむかしてのかくれに雪ふるの今のあけぬ
梅の花ちりかくれんこそ思ふこそ思ひ
独たれくいさ我思ふ雪の中にもちる梅の花へ
　　紀ちかふ
散まがふあるとうつる梅の花ひかのまの風の乱れ
　　こつま

吹風と何いとひさん梅の花ちるの時ぞ思ひ
　　大中臣能宣
匂ひと風ふきあつも梅の花ちるさへあやなかりぬ
ふちまの
ちるとすれば風のよるまつ柳の糸弟く乱れ絶
　　よるみ人へしらさて
屏風に
ちるとてもうるはしもちる柳の糸よりてそうるへ
　　大中臣能宣
たいしらさ
　　元しの内侍恒
まつ柳の玉田の糸とよりの合をそ絶をる雪の糸の
　　こそうへ人をつくして
絶えこそ思ひて西はもまつ柳の糸のりそふる人を
　　ちるまつのとくれて行くるこそ思ふこのりて

[illegible]

中務

[illegible]

天暦九年内裏歌合

[illegible]

たいしらまと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天暦御時屏風歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]けて人のんこまりとうく
[illegible]の[illegible]しるる時の屏風に
[illegible]

[illegible]田と人をうせて我ハうるはしき花よんとつくるはし
宰相中将[illegible]卜部屏風に
つゝゆく

あかれと桜のくちうあさの昔[illegible]れ物ゝ[illegible]れ
[illegible]屏風ゝ[illegible]行人あるか
伊勢カイ

[illegible]ちゆるわきとあさの花をゆる人も[illegible]
影ゝゝと
よろく人ゝゝて
[illegible]ゆるあおなゝくハめるもの[illegible]

とふ[illegible]あしとおのひ[illegible]ものゆ[illegible]人めるゆ
[illegible]
[illegible]時三尺人法屏風に
平忠盛

[illegible]の[illegible]と植[illegible]もるく[illegible]れ[illegible]者[illegible]て行人[illegible]
たゝゝと
よろく人ゝゝて
ちくゝ[illegible]ゆ[illegible]ハ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]中納[illegible]ゆ[illegible]懐[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あれたる屏風に紅葉の色ふかくなりたるを
天暦の御時に屏風に　菊の花
菊の花みる時に八月のもちの月見るみ[illegible]
歌しるしなし　よろづよ人しらず
君やんまさしき菊のちくもむつまじ我やあるらん
屏風に
菊の花とそえて　ゆかしやおつまの妹八月
たつしらなし　まろと人しらず
そも果て紅葉とかるゝ菊むらさきにけりの色なる
延喜御時菊つゆの女はの歌合のうた
勅ぞとあくるかねの色掘もむすびとゝまる

あれたる[illegible]ほりけるかよりの[illegible]
みられて[illegible]　ちの世まで[illegible]
後菊原めしあるとあのちくもんをもくや風よあるん
小の文のときの屏風に　はしゆめ
まそ[illegible]　[illegible]
真子の流　新合に
ちくもる本の下風八月かつて[illegible]
歌しるしなし　よろづ人しらず
[illegible]の山[illegible]ちくもの[illegible]
天暦の時の合に　小貳命婦
[illegible]
たつしらなし　[illegible]

[illegible]
天暦の時の歌合
[illegible]
[illegible]
[illegible]

拾遺和歌集卷第二

夏

天暦御時歌合に

大中臣能宣

蛍の火の消ぬるかとみるまでに草の葉ごとに光ぞ散る

扇風に

素性

あつかりし時の扇の風ぞ今は秋の夕べとなりける

水辺の蛍

源重之

夕されば蛍の光ぞ見えまがふ秋の近くの山の端の月

たづねまつ人と作せられける

源重之

夏の夜の月の光し待のあけぬるかとぞ思ひまがへる

盛明のみて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

神まつる所の御ぞ白布の御ぞ

たいしゝとて　　ほくしゝ山

山城乃国○こう嶋郡御花八幡白布の衣かけ一ゝ

はるゝ人ぬれる事かとゝろまてよ坂○もたつこはけ御ぞ

事かけてゝゝもゝろおうひゝゝ山郡ゝとゝろく嶋ゝん

和琴のきゝ物ゝに時ゝゝる和ゝくゝゝもゝはゝまつる和

ゝゝ山ゝとゝ色ゝゝ　　久米廣縄

家ゝゝて行ゝとかゝゝゝあゝ引の山郡ゝ二あゝもゝな

延ゝ社御時は屏風よ　　はゝゝゝゝ

山ゝゝとゝゝゝゝゝ人ゝゝかゝ郡ゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ　　よゝゝゝ人ゝゝゝ

山ゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四〇侍時古屏風に

二おもてきりくとかなりて時をる秋深くもゝ咲つるを

小さなのかなの屏風に　源之丸殿

紅やゝ山吹くゝとつ色こ今一おの咲る向さに

敦忠卿の歌の屏風に

つゝ西なる

さゝとふいるゝ人ゝ歌かゝて山歌を絶まきくゝん

延喜侍時分会に　よゝん人ゝ

西月面いちゝゝるゝ法師のひやめ乃花もみさきは

屏風に　大中臣能宣

さのゝまてゝとゝゝゝゝ思ひのやめ花今日我ゝ目のつゝまるを

たゝゝゝゝゝ　よゝん人ゝ

ゝゝ面ゝ月ゝ月ゝの屏風のゝ尾もちゝゝゝゝゝのゝ花のゝゝ

延喜侍　新古

月ゝの山時をゝゝゝゝゝやあやのやゝゝの花ゝの孫ゝゝ

ゝゝん人ゝゝ

詠神ゝゝゝゝゝ

けさぬんの家の会　そつま

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九条右大臣家の加茂の屏風に

平ときより

あやしくも春の雪とのみ見てふれぬ人の袖のうへかな

なつ

紅葉の山の木ぬれかけ八ちらすなり

延喜御時の屏風に

はるあき

交ぜのかけとおけるやまぶきの花の色にもあらぬ

河原院のいつかのぼりて

恵慈法師

紅葉の色の深のあと陸ひあけて交ぜの雪とぞ見ゆる

家の後にいかなりしとつらつらつ人のうへつらつらつ

いせ

いつくにか咲かすらめ我やどの大和なでしこ見てふれ袖を

凡河内躬恒

ふるさとの花の色にもあらぬ神代の春の雪

右兵衛

ちりぬるかとてのうつる秋のあり

ようそ人しらず

紅葉をとりて成ちんとて山紅葉の名ことに紅

右大将定国十かのうちの屏風に

たつひろるる

おかのうへのあり松にまちけりひろひて深くもうの成は

拾遺和歌集巻第三

秋

秋のくれ　安法法師

夜長はつくづくとなるくれ初て秋の初をたのしくぞ

秋ぬれば　延喜御時屏風よ

秋ぬれば　はぎのうへの露　秋風の　人よりぬれぬ　袖ぞ

何　東院　秋きぬと　人はいへども　あかぎる　秋の

人くるとて　伊勢　秋の

八重　藤原　秋の

安貴王

延喜御時屏風

秋風に散る紅葉の川波のたちかへるべき
かさのうへの人丸

天川なかれのほとりあくがれ出ぬ年ぞまたれて
あふ夜ぞ待る

小野の宮

小野の宮の思ひまうけたまふ我が身の変り
人まろ

延喜御時月次屏風

はつ〻ゆき

殘雪のかすかに春の夜いとゆかしん
左衛門の督

一年に一度とおもへど七夕の
中絶なきは恨平家屏風

あふ坂の関

いくとせの月日を七夕の逢瀬と思ふ
七夕東宮

いとしらぬ孫さらんとやらん今日のさまもいとあるたいしゝさて　よろえんしゝと

あまうてもあらてもあるく職業いつくんのけしけるさき

あるこのるのいひうて天の川をこまりてもさらさらたん

あるこの後ハ後ハこんきにあるあるのひ

女ゝのもしあるる孫ゝのあるいたれとけてきもくあんん

ゝもたあく極しもあるく女ゝもむゝあるやゝとあるあ

いちゝあるゝさゝるのむ女ゝ　小野ゝ太郎太郎

ちゝゝゝのゝしあるくさけるあるこまゝりて

よしのゝ

女ゝのあるあるのゝりにむゝれいあるやゝあくあるやゝんあるん

たいしゝさて　よろえんしゝと

白ゝのあるつまふする女ゝのあるひあるゝにこまゝ

ゝ孫ゝ孫ゝ孫

秋のくれの花のうめをそこに女房むかりまゐらせ今おくるかな

紀貫之

かりにとて来ぬるこんぢうおもひつきあるる

陽成院の屏風の小野をかりしるる

かりにのこる人の一番れを女房むかれの後をかけうるるる

ながらの流のおまへをの栽うるをさせられひてられよ

なをしもあるせらしあるをれえ

いせ

極楽寺の花の中の花をれをむらえをもるもるん

たいしらを

よろえ人へしるを

おれるを待るるはるをむるを宿りて

大納言のを

あるるの雲の雲のうしめをとしのをとうるをうるの歌

延喜の時月次の屏風の歌

ゆくすゑ

あるるの雲の清るるを新るをて今やるるん月の歌

屏風の八月十五夜池ある家の人あるをひしるる

とこを待

源ちさうる

あれ面をる月あるをかるるれをうるひを秋のうるるる

るる月の屋をるを待るるを

よしのふ

姫の月波の底うるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

廣澤の家のうるを秋の月おり待るを池

ある人のあるところの
姿の月見るとあるうるはるの紙ぶとの新しきあるそら
　源宗明　右兵衛尉景明

　為藤院法皇八月十五夜うきそらふる
　　うきすみ

あるのこのあるわんもんはるせんかくあるはるん秋のこの月
　延喜法皇八月十五夜義人和のことも月の
　　義京経房
えんーはるる
きたいさ出さあけき秋の月重のところ出やーるん
　同ー法皇屏風さ　　うつま
ちこふまくもひの月のえざんあるあ人のんありくり
　　ぬーーーと　　ぬーーり
強ぬるんとあるさん秋の月てきひの重さ重ぬ重ん

　　慶義さ家ーさるよむーーのようの出ーーの出ーーの
　　よーみはるる　　　

亭子院の屏風に

[illegible]

三条のきさいの宮の九月

九日の日

我宿の菊の白露をかこつにて世つのうとく消ぬ也

[illegible]

長月の九日ことつむ菊のおもかげまつ老ぬる哉

在原業平朝臣の屏風に

[illegible]

延喜帝の時の屏風に

[illegible]

三百六十首の中に

神なびの三室の山をとゝ[illegible]

[illegible]

大中臣能宣

[illegible]

吹風に

秋ちかの新吹こゝろ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大井川[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行はるゝ時は国うて行るゝ時の歌の名所
うつりて行るゝなり　法橋観教　後天僧都　延暦寺

あうさか姫の山をこえて秋の
二条右大臣西条田の山さとの陸子の恋を旅人に
紫の下こ屋とりろうの師　恋草の法師
今すハ紫のりうるやうせおむを旅の日数
鄙しるを　よもの人しるを
とうかも人うハあしの山うぢ人まつむしの鳴るかあるを
延喜の時中臣の朝臣　歌
鄙あるを山のあはを秋ちの陸をもんせをうちもん
たりしるを　僧正遍昭
姫山のあしのあるを山のあるを地うかあるを

秋の来ると山をてゆ陸子の風よ秋ちふ
ふうて紫むらさきおしうちもうあ紫の山の風
紫の山のかとをうりけうを紫のいとちり行
れを　大納言公任
彩色紅葉の山の色を名れを紫の絵を秋今来
鹿しるを　よしのの
姫雪の紫ものもるを八紫の絵を秋
大井川を紫の八紫の絵を秋
壬生忠岑
以後れ木の色をうを大井川を八紫のうみち鹿ん
たりしるを

[illegible]
うんの秋をうらやうとして仍りて返てくさ
[illegible]て秋の かうそう をりの八我うとあしの葉にこそ
みくるる

拾遺抄 第八

延喜比内侍のかうしの屏風に
紀貫之

[illegible]
寛和二年法深房のみさしにあるを
[illegible]
細代まかりつ[illegible]ふ角移日をへてみまるる紫
[illegible]
[illegible]
神世月時雨ふりしを昔のなみだ[illegible]

[illegible]

[illegible]田川に[illegible]

[illegible]

かゝれたる人丸

[illegible]の山に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

池水やおくそこしらぬ松の色

紀友則

[illegible]

[illegible]

屏風に

如法経の法をとなへ[illegible]

[illegible]

恒徳公家の屏風に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天の原ふみくやらんかとよるみるのよの月
源宗明

袖をとよるる
ちるとそ見つるとよるる袖をハうしろ
なやちるらん
ゆとかくるひ行くるる年こそ袖をちり行くこころ
うとく行くれそ見るのふり行くるよ
もしこと行

海ともけるあくるあるのうるおいくもおくるる
山あひこ雪の消りかりて行くると
いせ

見引の山あひまふれる白雪ハとれる衣のうちもきれ
あつ之
秋なくハ月とそ見る我やとの庭白おくあれる白雪

ちる〳〵と
赤やとの雪をつけても有さとのよるの山ハ見ひやるる
屏風の雪をうれ白ふるそて行くる和
若宗佐為朝臣

我ひとり越の山路をこかとも雪ありるる行とそる
たい〳〵と
たいこん
年ぬれハうれ白山老ぬるりあり其年の雪をうて
入ぬ行道の家の屏風よ
かひのり

こんにゝ白ハ行のこゝろをよるれ白いく世つりふる雪ふるん
ちる〳〵
山さとハ雪海つそ人もふ〳〵今日こん人と表ハ見

人丸

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ

右大将定家の屏風に

ほのぼのと春の来しかぜ山ぶきの花咲そめぬ

次家隆卿の屏風に

人もかれ草まばらなる山ぶきの花咲そめぬ

屏風に

あさぼらけ有明の月の残りなく霜置く野べの

よしの山

桜狩ほのぼのとかすみ立春の日の

屏風の歌に仏名の和

よしの山

ふるあらの小野の小笹の夜の間に

延喜御時の屏風に

ほのぼのと

年内立春の屏風に

あしたの原の雪の下草

屏風の歌に仏名の和

あかつきの夢の中にぞ春は来る

よしの山

雪の下草

屏風の歌に仏名の和

人はいさ心もしらず故郷の花の香ぞ

ふるの里

新院の御屏風に十二月つごもりの和

かすみたち春の来ぬれば年の内に春は

百とせ分の中に

源さね

ものとのうとなりてまたとしあるとしなるう
うれしきと

拾遺和歌集巻第五

賀歌

天暦御時歌合の歌

ときはなるかすみのうへにうぐひすのこゑうちまじりたる時の長奉送使
なりけるうりかうむとて　中納言朝忠

ときはなるかすみのうへにうぐひすのこゑうちまじりたるは神さびにけり

第一代の御ときとて新宮にまゐりたる男使ども時うたよみけるなり
そのかみにて平野の社にまゐりたるとき　大中臣能宣

うゑしよりはるのいのちをまつのきはちよのかずにはなるべしなり

仁和の御時大嘗会の日　よみ人しらず

かすがのゝむかしをたづねてはるのゝにわかなつみにぞ千代のはじめは

後宮后宴のとき　紀貫之

みかのはらこゝにぞ都ときけるかはのなかれのきよきをぞ

清原ふかすけ

行きて行くう
行きもやらぬの思ふ人の代のひつきの松をうり
　　よしのゝ

苔氏のうぬやこまうりて
ふるさとの松ゆゑ思ひあるとき松の絶るとおもへ
　　よしのゝ

うゝやの七枝ゆゑ
思ひ人百いき代とうゑれハかつくゝふる七日こける
　　平かひより

右大将藤原資房うぬやの七枝ゆ
今年ゆゑの松ハ七日ゆゑ
　　よしのゝ

あるゝのうぬやゆゑ
ふるあのかとゆゑひとゝやれ
　　よしのゝ

ちとせとも数ハさゝめて世中ゆゑ流れあるゝ身とゝ人もいふ今

藤原誠信元服し侍りける夜よみ侍る
　　源順

老ぬれとゆゑ思ふ世ゆゑ思ハ世ゆゑ
みよしのゝ山ゆゑ
　　よしのゝ

陸奥守ゆゑ
天暦のみゝとして十ゆゑ
ゆゑ今泥ゆゑ命絶ゆゑ十八ゆゑ
　　よしのゝ

山陰の山の男ゆゑ松を抜てゆゑ

なのたうく三位さの山ろうそくあるひのめのさちろくしの
歌まはしとて中そくの賀しゐるゝ時の屏風よ　仲行卿師

そかへぬ松と竹とのまの世をつれひさしとまつのこころんん
ありしゝかなよ竹の杖つくりて竹ろよ　藤原内侍

一ぬしくそ代とこゆる杖ありてつくもつきまつるようとひハ
ほ情とまて賀しゐる時の屏風よ　大中臣朝基

天ゝ亜と竹のそくへんちくれ石のいくりかゝ松もあるひハ
まを柿の緑の糸とうかゝいくるのまとゝあるん　もとをけ

我やとよ竹ろちくの若ちくりちとせろくもいのりしるかな
おなしゝ人の七十賀しゐる竹の杖をつくりて　かのもり

ちとよろめくふるる竹の杖ありてまきもつきもとせをこゆるる
くるる山ゐるとつる杖ありて今万代の坂のゝめあり　つるの人

一条摂政中納言竹ろ時父の大臣の五十賀しゐ
竹ろ屏風よ　小野宮好古朝臣

吹風とまろ杖ありて君ろ代の新ろのとけき
桂中納言敦忠卿の賀しゐ竹ろよ　源重之朝臣

万代も松ろ竹のくねたくゝめかるゝんのかゝりかるれて

入京内裏のうちの賀茂民部卿屏風に

いせ

たちてこむれるうめのはなのうへにかゝりてゆくへもしらぬはるかぜかな

ものゝけのあるかなうの絵ときをしたりけるに

天徳三年内裏にて宴せさせたまふに

九条右大臣

はるくるもあやしきまでにあるかなかくてちとせのまさるとうつせん

たゝ一人ゆゑ

かゝるつちとせのまさるとしもいつもむのちとせのくらゝ

高子后の命

三月の廿日あまりのころほひのこと

康保三年内裏にて三月晦日せさせたまふに殿上人

のとのこゝろをもわけたまふ

花のかゝる

小野宮太政大臣家にて社頭へうつされ

ける時もとの所にうつる　三條右大臣

延喜の御時に屏風に

松をのこゝろにかけて思ふ人に

見せ

承平四年中宮の賀に

参議伊衡

世の初めの日小八条のおとゝ

宮太政大臣家にて社頭へうつされ

ける時もとの所にうつる

右兵衛督

はるのかゝる

はるのゆき

はるのゆきとけにけりうぐひすの

なくこゑのみぞ

はるのこゝろは

はるのこゝろは

はるのこゝろは

御殺しそ男ふことをそなつる八百万代の神のあんく
天暦御時お哉のえん臣をなるは
小野宮右大臣
万代よかくしぬ元のうをなれいるるの秋の思ひ人さらん
廣式王家うそくふこ所よりをせ侍りるるなる村
のとりの虫とふ孔雀
千年とうこよ村こんせ四めこやれたの年うやをこ
右大臣源のひろ侍るたれるお哉合し侍りるまけ
つとをうとなりたちこのすけをこうし侍りるの
よるるのうこはこうて侍りるるよりをせ侍りる
侍りゆ四ふ

だら年の数とりはうんん約かりみるる明るあるはのまきと
天暦御時侍侍る侍文ちうこそよりをせ侍りれて
おい初る松よりそうこうき留侍の末の世なくあんれ拾しハ
かりうんいさをせ侍りるうこはるのかとといつけをせ
侍て
いせ
ちこをせこも侍のいのんうこにとむしのうへをもうるく
たいしこうこと
よるこ人しこもを
こうこ侍ハあまのねこ侍るまれりをそあるこもつきるへいあるなん
かこの屏風よ
をこうすけ
うこ侍なるの四ふりのけてもをそうこ女の神のうこて
侍りこうこて

別

春ことの心をうるる人を暁ふかくたちかへる
ふるさとをうらやむる人のうらやまれ
ゆくえ人しれ

春霞の明暮をうるかはるかはるなる
ゆくえしらに

梅花をうるかをられぬ匂ひをうるうきす
ちるはなをうるまとをうるふるさとをうること
ものをうるうるけるうるのうるれ人くるほうて

そ行のうるうる

ちるものの中にもうるうるはるうるうるた

天暦御はつ小式命婦をおにかうけるこれ
大ぞうの和てをしをとをかうをぬきかとて

陣賀

夜ふかたちかうこえとをとこ宵をとをとこ勝をとをとこ
ふるとなくこかうかうかうる首はかの妙風はとかうえ
かてこえとかかうかかはかはめかんかうかはかとかうとやえこん
はしもはとかしかしこんのかうこれかいかかかをかうけう
天暦はは九月十八日舟こかうけうかうかる
君ゝ世とかは月とかこかうこれかかか

あらまくくるしうふかうおぼしたるあひだ
おぼろかしくる　よしのゝ
り　未に今もちらぬふるさとの
大江の春あつまくやうるかるん
はるかなるとて　赤染衛門
井　むらなかにあはぬ人をまつ
保　ちるはなにあはぬ人をまつ
ちるはなにあはぬ人をまつ
ちるはなにあはぬ人をまつ

[illegible]

御ぶのしお彼と

情しなかるやふんなり泪とたもえやいとしろ

女房人三河

玉鬘の草子成うえん人々ちゑ見ゆ者ハ考ゑ

ちゑ人々ちゑ

そしーーん

ふるの中ハ用ゑとゑ紙ハ[illegible]

ワゑとれゑとゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

源氏系ハ[illegible]

三条左宮大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後あるべきにて彼くつるやうんかの何の業にてわたと
実方朝臣みちのくに人にうり侍りしにたてる
くるほうたにて　太政大臣公任
東侍の本にくるくるまうのぼりぬ八月の月はいとあかしやハ
紙しらに　よもすがらしらに
張紙八紙にてぬりたるこの東侍のこの八月の月をいとあかしん
恒徳公家の侍ふ　かくのごとく
ものとそうの侍ふ八張人やとりたる紙を名付けりん
たくみの侍のわたりうとてあるものて
ほうらしに
夏ふかの侍ふこの紙を名付けるとて侍ふ
歌侍ふけるくしに侍りうとてきうりうるあり月と

きうに侍りうに侍りうに侍り

秋の猿ふかうなりにけるやうにて

よしのゝ

女郎花さかりなる者をいるこのいるとらんとすなとめや

はくくへてうけたるて　宣之

あるかうなる花むをいとおくうつて宣ん分の

帥伊周はくくへまうるとうるかいとうるまき

はうるはくとうはうる

おもい出なれたるのとうるとかくるはうるとあなうけう

おくるはうはうてはいとことてはうる

贈左政大臣　菅

考すむ宮の柳はゆくとかゝるまてにはうるはうや

おのれをとくうるうこはうるとうて侍けるとた

流の人にたゝし小雅は高ふ風うるを色天ふ分て

ゝうゝうゝはくく　榜本人丸

あゝうゝやかはうるはいつもなるはうるうゝうゝん

人丸入唐は分ふ分ふてゝん

了在本

女はなうゝうゝとうみて侍けるうゝ

かうの城う

拾遺和歌集巻第七

物名

紅梅　　よしみねのむねさだ

梅のはなの散てのちにはいそうはなんとすらん

ちりぬ

むしのいろとあくまはよりてはなのいろはあきらめやふかくそめけん

いとやなぎ　　菊原のきよすけ

旅のいとやなぎをみてよめる

さらとりのも

いろをはあまたすれども常にまさらぬとりぬはかくれなきかな

かうこのこゑ　　いせ

うくひすの沖にあくにはのこゑなれ出てくるものとえやはあいさまし

かいたくて　　よろん人〳〵をて
こゝろいろつくるまく稲ろうんもゆけさんも
さくるれむさ　　如覚法師
紫のそこにさくるれむさ一のらまのゆゝとゝ人もこゝろ
ちをつ光　　ろん人〳〵をて
桂てうるるんくにもくあむのふとゝ系〳〵もつけんこゝのあや
つゝゝゝん　　しさ
川くゝふ今ようくん細代こゝはまつ紅やあんゝをゝん
きちかう
あくゝんのまゝ紅ちくゝふむうくゝ色ひもあゝをわつくゝう
あさうや
赤やゝのむのくゝのくゝめくゝそゝのいくゝふるあさうわくゝうくゝ

けさこゝ
忘れうゝ人のいちくゝもゝきくゝもけゝまくゝ稲くゝ
らに
秋のくゝよゝ紅てくゝむとれつゝれくゝをゝ出くゝ高くゝれ
かくゝや　　忠峯
白くゝのかくゝうゝやゝて清さくゝはくゝよゝ紫くゝむの今けゝ紅はゝ
くゝくゝのさくゝれ
山川はくゝのくゝあくゝれくゝを淺くゝせくゝせけゝ渕くゝ秋はくゝん
れむし
紅つくゝのふくゝむつむくゝん紅はふくゝあくゝをくゝうくゝぬくゝ
ひくゝ〳〵
今くゝんくゝひて色れくゝより出ひくゝ色くゝのくゝくゝくゝ

仙人が笑本ひろしあし川の山の山ぶき　はるゝ田ぶき

松のゆハ秋のちくさ吹ぬ西ちりうくせちあらけて風をいし

ひとゝもとさく　　補相

あさゆうとゝ人もとぶくらゆあしもうむものあうとゝとそてさすら

ゝとさうこけ

雪のもハうこけともぬしもたしぬまさせていつちゆちん

やはと

ふるゝ人ゝ家やはゝうんゆうこの形ゆの苦ハ義ゝ絵

いふこゝの

をみようのゝとゝ花ゝ花ゝ花ゝ

くゝゝとの

白波のうちかくるゝものゝうゝゝゝ

[illegible]

いめうひのこゑ

[illegible]

あくるひのこやしろ　まけこえ

[illegible]

あくるのこゝろ　ちけゆふべ

あさゆうたちもの[illegible]

あしりのこゑ　かまもり

[illegible]

さゝとの[illegible]

あ[illegible]

つゝのくけ　紀輔時

かゝりひのあさ[illegible]

ひろの本　三向草春

神おひのこむろの岩やこうろんこの川のみのにこゝろ

きさの本　とけこえ

いうこしおのこゝとくゝゝてかゝこゝ[illegible]

そこれらむし　仙芳法師

[illegible]

もゝ　をきゝ

[illegible]

けゝこゝ　[illegible]

おもかけのこゝ[illegible]

[illegible]

たかをとれとしかとしひめれハくひうらうもなハきらへ
おりこゝろ
池とろこあらろのおほれくいひのくらりあまろ陸
松くゝを
あーゝの山ゝあこめれこうそれ光まつらけ衣あゝん
いくくくもつくるかくくをとろ時ハまつらけくゝ絵こをおろ
くくくち
山ろみちのくとゆくろくきこにくくちゆるまかすくゝ
こくくやく
形をとれハまをめ紀ゝまろうもうらこうやくまこあゝつ
ろやーまめ
ろ岳相如
いくくり池あまのくくいいつくをや絵笑くくとそゝといひーハ

くくーのくくくり　まくけ〳〵
河岸のくくりおろくを和あくくふうちをくをあのあハあけつく
やまくくり
あ紫ゝよ衣のくくハもくふふくり秋の山くゝ絵くりくゝ絵よ
うやくくを
伊のくりやくくをのくくをいおくりてあやくくむのくをこうくれ
はくくく　大体ふくを　まくれ
我んあやくくひくくくまくくれハむこうくくくいくりておりくん
咲むこおりひつくくのあちくあくをのくくきあわくれて
つくくくめ　まくけくん
新波波ハくくあよのくくを毋ふく彩の風のくくあおくれハ
くくくけ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いろうつけ

[illegible]

祢[illegible]

[illegible]

月のきめとさそ伝ふ

久々[illegible]月の衣[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かのかるのむ[illegible]

かのくさろ

かのそさろ舟そ志[illegible]

かのそいつるのと

小男鹿の友まとをるあ[illegible]

祢[illegible]

一枚わそ[illegible]

むまひつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十九日

秋風の吹方の山よりもあらぬくまもなりぬるかな　行家

撰集抄に和歌の所出を分八

雜上

月をよめる　中務卿具平親王

世をうるる物思ふくまもなれども月よりなれぬ友なしつるん

清慎公家屏風に　　　

次郎兵衛の家にまかりぬしける時月をまつんのあと
おのことものよんけるを　菅原伸之
ふる郷の月の光と移りとまる世のいくくまをそうるや
参議安上うめの月のあるさかりのまんとをまうる
とてせうそこいひしれて侍りける人に
いせ
ふる郷とおもふ月さへ我者るて行時ハふる
花山法皇うりて侍りける弱ひきの侍るをとつかハ
たり名れを　素性法師
屏風乃歌
ゆくすえまつ月をたにうらぶれてけ
ゆくすえまつ
ゆくすえまつ月かけ
ゆくすえまつ月のあるかりて出る月かけ
ゆくすえまつ月なれといつまのあるかりて出る月かけ
ゆくすえまつ月なれといつまのあるかりて出る月かけ
ゆくすえまつ月なれといつまの

そてまつりける

行もあらいつくしうるとにたつむ月のいりなそうつくしのぬきあるくん
行平卿をとゝ給たる西坂本の山庄の滝の景をかきつけ
作りける　いせ
まとゝねしせきをへておくとゝ滝つせをくんのこゝろのそこもそこふか
中務
きみをくる中なる程をあの滝の糸をあやまてをまつりをきものこゝろを
たいしゝ　はしゝあや
あれくる滝のもゝ糸をまていくそゝもむの結をなるこゝろん
延喜十三年二月廿日屏風の詩をかゝ
よるとて
あれくる滝の糸をとゝしめけとゝみをれてあらゝしむ

大江千里
滝をとゝ作りける　たまつ持ゝ住
滝のもゝ水をてひさゝく成ぬゝと名をは流て行きゝくれ
ゝ川ゝ
大原とゝあるゝくゝを屏風のもゝををれもめうゝをひて
野ゝゝゝ水ゝの庚申ゝ作りける　松風入琴
琴をゝ作りける　無文女房
琴のひゝをあの松風をいつまのをゝうもゝくゝ物をん
松風のもゝをゝくゝ琴のひゝをのくゝをゝ日ゝこゝちあるゝをれ
天暦帝時名あるゝ屏風をゝ世をてゝ
ゝゝをゝくゝをまつりゝ世をゝ作りける物と

おのゝ宮の松の梢にうちあひさゝ波のあをうち風と吹くるを

　　あつまん

　　遠き所時は屏風よ　　清しあぐく

あ波ゝ吹松風ハ池の面はあさゝ波たゝり

　　同しゝ時大井ゝ行幸をありてへ〳〵ゝ宮ゝ参せ給ひ

　　ゝるに

大井川かハゝの松ゝゝゝんかゝる行幸やみゝーむうーと

　　住ゝ所ゝ宮の住ゝゝの時ゝ参ーゝ行ゝゝ幸ゝゝ

　　かゝゝけゝりてゝゝん行ゝけゝる

ゝゝゝゝ宮ゝゝゝうゝゝゝ松のゝゝ幸とゝゝゝゝ

　　あ陰の内住のゝゝゝかゝの屏風ゝ松の海ゝひゝゝゝ

　　ゝゝゝと

　　いせ

海よのゝゝひゝゝゝる松の深みゝゝゝいゝゝゝゝゝゝゝゝん

　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

　　ゝゝゝゝ行ゝて　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

歌一首

世中をいとはしとやこの山なる
はなさかぬまはかりてかはしる
なるわくるまつのけしきはかりを

後人まつる

はるゆくる

はるを世ふるあとをとる物のかたもれをやなとえをしん
ひろうれたるのわくらとあるのうてをうけるる

源為憲

春とくるあしの波をのこれるをとをとをとを

よろえ人一首

歌一首

とうあをををはるをるの田おもををさいくん
折ををいををのはのをををれて人のをををををと

ふるをををりけるをうをにひをしの物をれは

左右衛門督

朝ぼらけしのをををあをこをや明をれをひをのいをふん
天暦御時屏風の色をあををの物のをけら
のををををををををををををと

芳原ををを

芦をををををををををれ物けをををれをの色をを
ををの色を墓ををふをををををををををけを
かををのをををる紙をを紀つけて物をを

よろえ人一首

をををををををををの間のをのかをををををけをを今かをを
ををををのををををををををををををををををををを物

いとひ侍りしを思ひ出て侍りて此女の
ありしよりひきしをりてうち
思ひたまへ経ぬ中にまかりぬとも云て約月のめぐりあ
はしめぐ
はしかりしとて
年月はむなしくあらぬ旅ねとおもふにかなしくなり
侍ぬ七月林ちふまりけるにとくれてはうて
ことてよみ侍りけり　藤原後生
むしのなりし樹のもとにも月の林のめにいるひ
常原の大臣かうふりし侍りる袖をみよみ侍る
年月
ひさかたの月の桂もあるけりと家の思ひふるせてし
くまろ

月前に衣さたしん名の事ふれて侍りしあとに
ちりとに人いかもとりてきん我はくるしき麻衣
久しの面をあやしくる我衣ものひりの時もあるさ
ちりはいとそ衣まかさあるもいかもとのうらく
も絶こくはうけ時まるる
名されは衣ふさむしりとそ思ひ出てはやきん
あるされ侍りる乃ちそよりん侍りそる
　　源宗政卿　廿首
あまの原乃ちやとりもあるかうと命よりはてもおもわあ
うき本くいふこうと
あれ本を三年おてはあひ人世ちきるうゆく
侍りそ時いもうとの女はの侍りと

年之文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちとせあり
川のせのうつまくみれそむもろ草紙をろ川の舟ろ
やまもとよあり
あるる神のまもるめるみ宮
緑系
つくしよ者名人も都こしやみさのひろくかくれん
彩しくしと　法こ西ちや
人もれとちやくおもひあり川のゐ下あるよかけ分てつ
いさのこ西ちやにまうとよりて
人まろ
あ奇海こ舟系さんとれもろあるものとろよ海こちん
天暦十一年九月十九日新文ちり伝ろこ内より

おのふのふるこのもろ紙ろ
奈融池陣時新文下伝ろこ母のお新文ちり紙
こ越伝て　新文安伝
世こられ公文もおえなりまろ山むろ一の今こあるこあみ乃
あとろの安まをおさむる時ようある
人まろ
あをろ川おろえ波一せうませ公ろあるあも出宗ろほ
小一條左大臣ちろ川かくれて法かの家よ伝ろ伝る
のあさ伝ろをは伝て　小野さえ太政大臣
とられあて伝あるより八せ八つのなをろをえ出ろ

[illegible]の土御門の[illegible]のむこうにあるてのちかさ
うせのかさをとりてせて行きれて

おもしろへ　九条右大臣[illegible]

[illegible]を命て立おしつる世人らのいうかるかをよけとそむ〜ん
大武蔵国[illegible]のおひとうつを行くうとせうこう
のりてかくしたりうれハ

やとりけ

[illegible]り京のかのうちもまうこんをうんとうを
たいしをと

中将

極てうらををうつ世をとをあををうをををの行者
四会うをうをうをひ行うるとをよりうをのをうをひをををせ
て行きれて

[illegible]のの今ありとふハあるをとをををとをををとををを

くらべてすに　源兼明

ふるさとは世の中にいけしとおもふるさへかなかはさりけり
ものしらん人にとはまし

世中にあらぬものにもえてもあるかなかたくたんの
よのなかをかくいひくてそくいうやいふあんとすーん
男はうらうらあとせちこけさしに付りてあとこの
いひつりける

古のとこのたくひなるものとおもはさりしとうんとうとう
おもふ

拾遺和歌集巻第十九

雜下

あるかなきかの秋いつまでかはるらんさてもはかなきこの世なりけり　紀貫之

まさきかはもみちしてこそ紅葉ひつりにいつをうく紅葉うんは
えらいのみこ業香原のとーとうとこ秋いろれら陸
けるこそひはたれて鶯もおうーう行りといひそれハ
おかしろかさくーとおとられいうくいひて行たれを
大こうの好こんはせーかと紅みる時いつまでもはし
鶯しーん　ようん人ちーとも
まさきもものひとこそ笑ひ物のあるれい秋ろはまれる
春歌流のうく学ーく歌てくいつれうまさろとや

せゝ[illegible]れて　大納言[illegible]

わらはにいつまでもあるべきなれば[illegible]

そこ[illegible]たゝ[illegible]ことひたすら

冬後伊勢

白雪はうへの雪といふれども[illegible]

ゝゝ

小野森のちくらんふる[illegible]

[illegible]

又ゝ

[illegible]

ゝゝ

[illegible]

たゝみれ

[illegible]

これひら

[illegible]

松ゝ[illegible]

[illegible]

白妙のちるき月をゝ[illegible]

ゝつ[illegible]

[illegible]

又ゝ

[illegible]

[illegible]

ゝつ[illegible]

[illegible]

又ゝ

[illegible]

伊勢

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の浦や[illegible]とふるんうきなかの[illegible]
[illegible]のつ[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

かくそうせさせられぬるをとてありにけり

あるあるせさせうー伺ひるる法師のもそうはらの

かて伺ひるるまもられの内よりむとおもてをひ

伺ひられて　　寿丘法師

いかあるとあるを袖のぬれさこそ拍子のひろうと金こそそれ

月をとん伺ひて　　よしつの

梓弓はるるるんあるる山のもとをいそ月のちて入らん

賀茂義を伺ひうて伺ひるるおもそのうん伺ひて以ひ賀か

くれていとくくそきくいひをもて伺ひられて　　いせ

命めをうる君はみをしを川のあるを流しやあるをれ和歌

解宮を車のうもとをひをはらして伺ひるるふ伺ひ

をとを伺ひてをるをいを人をるられはかるをもあるとをふあるをし

をを　　つるを仲文

あるをいををあるむをもをやをるんを麻やをるをををををりけるを

唐衣をを家のをををあをををあるあをあをを　　あを芸法師ろイ

けのむをのあるを

雑波はのあるれをふはの中あるはのあるはのあるはの弱をあるはん

はのををに伺ひるる人のりををををを伺ひるる　　たををん

多ををををををををる君無をあるをををはあるを

はのををはるれりけるををををををを人をみを伺ひて

ををを伺ひをををはをはのををのををををを里をををけ

雜色ども[illegible]あるゝ女のまゐりたりしを
まゐらせ給ふとおもふ[illegible]とのあるとてあやしきさまに
[illegible]ありてゐたるあひて侍るよりけあくて[illegible]
えあるとりけるこゝとあるいひつゝたりゐれと
おもふこのようこ侍るゝ
[illegible]ゐてゐのりうとおもふもの[illegible]雜色の浦ゝ侍ること
かくし
あかしとうんとそうおのゝ[illegible]の濱ハもみゝぶ
いとのこゝをおもふこゝをまりたりゐるこゝのあくあり
ゐるゝかゝとゝゐるこゝゐるゝ侍るとふちつかゝりまゐ
けいゐの女院のかゝるこゝ侍るゝ[illegible]たりゐれとけゐるこゝか
[illegible]

ありゐるこのかゝるこゝゐるゝあやしきゐるこゝも神のめゝこゝり
ちゐるゝかゝるゝたるゝとゐて

みつを川海ゐるこゝもあるゝゐるゝ侍るゝ衣をめゝてかくゐん
ゐるゝの秋むまゝのにゝをゐれて侍るゝむまゝゐるゝの侍るの
まゐ給ふ集侍るゝありて侍るゝゐるゝこゝひとゝかくいひつゝ
ゝ侍るゝれゝ

かくしまゐるゝまゐの和ゐ蛾しゝゐれ侍るゝゐ八秋の侍るゝゝ
源ゐゐゐゐゐ母のゝゐ侍るのゐ蛾ゐ侍るゝゐむまゐゐのあゝ
ゐるゝゐるのゐりていゐるゝ侍りてゐゐ氏ゐ侍あひてのゝ
ゐまあるゐゐいゐて侍るれハゐゐゐの女のゐゐゐ侍るゐ

おやの親ことごとく世をはなれて家をのがれ侍る
たいしゝ　人まろ
ひさかたの日かゝれぬる滅せずは系後えんあるべきをおもひまうけて
あるべきこと　まさらせて
あのうへにかゝるもんをは枝は川野を紀のあるもをれば
名をのこすまつふるまをうる川さをあるをあるより
毎月の日大川と川とまうり海りうるたひのつきより
なれを　志茂法師
世中はあやしきを拙なるふれと大系川のひるあるをける
かうぬり柳とうんて　仲文

この柳系はみとりにみるものとうまをうあ半の長あるん
天暦伴時一条摂政義人改て伴なるよおひと
うけて伴こあそうけるまけをりて伴なるをおひく
あり伴なれはおひとかゝ弱ふ　伴　制衣

白波のおやかをこと伴ありとに濃の志砂の数をも引る
内伴るうゑの大大和実濃貞うとうをを伴なる時
こうちこ海りうりうれのうのかゝあさをとかけ
拙して伴なるをうて　小野宮実方改大臣
いつかとのをみれをこ海あをう改あるをに改の和弘
西
とうをても伴のようををせん濃あをあるる濃濃をを伴て

たいしゝて
ゆゝ底さゝくけゝうゝかゝうんよゝるゝもゝあゝゝ陸の糸
ほゝゝゝえ獨把汲ゝゝ伝ゝる時ゝのゝゝのつゝゝの陸
といゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長谷

ゆくえ所なくてまうでつゝ

人まろ

ちはやぶる 我おほきみの 乃こさゝ 紫を天の下あれ
世々の紫 とうらいはさりとて 屋戸川乃 ちはやぶる 高し
又こゝ迄 とうの くふのさゝれさりあきらの はなよ
えはしらぬ くきすてゝ ゆくゝ ぎす 大ゆくゝ
舟ちゝ屋あさ川 ゝりぬふゝく 夕川 ゝゝし
この川ゆゝ あるゝ ものやまのいやるかゝし
たまゝゝの くぬきゝの えゝ 去 れとあゝあゝを

反歌

ゝれとあゝあゝ川の流 ても ゝるゆあゝ 行ゆ り乃

あゝむ乃ゝ れゝゝ ゝよ たゝゝ さりし ゝれその 山の
山ゝむ みゝせ ちゝ ゝぬゝ ふゝ ちゝ もぬゝ ゝひ ゝ
ゝるゝ ゝゝ ゝゝ ゝは ゝひ ゝめ ゝし ゝ ゝよ
ゝゝ ゝ ゝ

うくれあるこたくさのあるかひありてうしなうくん
人はたゝ我かひあるこたくさうくの世さはかくる
まゝにおのれの松はいくさはくゝ老めれとみくのこゝろ
ぬるさすてんまゝはいつくもたくゝ波のあくちくく
行くうくひゆもくうのをありくくる舟のくれと
えもくくこあくれいまくんにちくくくあまのうくかは
くくうくくてひくくくゆくくぬはあるくくし

かくゝ

世中とおくふくくくくくうくくくくく

あるときこの物のひとりる女のこのひてうまけ侍て
とうこうありてせうこうて侍るるまあくこの
よくこ侍る　　よるんんしくこと
いまこともいとこさしうとやさとこのこやうこうみ
ふるちとまかくりやくるこしゆつちやう侍りくるて
乃くの乃きものよろこもこくこくひこ赤ハむあるき
むけさこかくてもこあくひ強ひをこくけてやる風の
こくりこに法こきかるくちとりこくみハふくく
みつしはみ　社のこいくくかれけくを法もおきあ
きみこよりかひあちこ高こ伺しくこと赤のこひとり
うきあのこくれてよにハこくこくんこくこけてハ
くやりひ乃くあるこ乃こくもつきあくくおもひあるこ

ちくうれもこありつちくてかくこくこくもくくあるくこの
あくくくれこちきひこくハこきくれもまきこくれこくくり
こくりあくくくれもくこくよのあこくあこひくけこの
あふりあれハもりいくそくくくここ乃　花のくこくよ
はもこくおりくこくくよ侍のくこ乃　こしのひあまこ
祿こむこひ世くこくハけくもこ花もこの　ゆくくあれ
こくくくありふん

寄藤法師時之歌　　赤三条右大臣

こくせこくこ侍くく

あくくれこくい法くのくこやのくこやひくくくくこくくこ
あくこふくてあくひくくくこくハかけまくくもかくこくれこ
くこのくくきかけくあくこひおくくれくくふくこくの花こ

ぬくうとしのあゝ[illegible]うまハあそこゝゝてせゝ[illegible]技を
あゝゝさはゝゝゝくもゝくゝゝゝゝゝゝは[illegible]のひゝゝと
たれゝゝゝんとおゝふんゝゝよ[illegible]ゝかゝゝゝゝゝゝ

とけとぶらちん
これらは返さいあるものとあらせ〜きてゐる
くれて又市返し〜
いうもせんあるふるものちく〜はるの
命さきさく

拾遺へ　十

拾遺へ　十

神楽歌

榊葉をゆふてかけてたる世ゐる神のみまをひろのはけ
ちるさくのうとかくハ〜ちとろられハやうう〜ちんかうまるあ行
ゐてくふハうろふハあ〜ぢるあるとかれとそひめのうえのみてハ〜
みてくふぢるあ迄ものとうとく神のみてまうられておつさかやう〜を
ひうさうとけさうくれハ山人のちく〜せつけ〜てきれる枝あり
よも山の人のくうとも〜ろうと神のみまをうふうそまつれ
いうめう〜ふるやおとめのたうもうおくうのとおて〜えれうう〜ん
根のめあさのおかとさけうとうあ〜れ紀と稲るハたうまう
我弱ハうやく〜ゆうあく天ゐたうやくされ器のむさ〜のうく分
さいうとうさ衣ハをう〜ん衣ふれと稲ひうく〜ふくうめてハ

[illegible]

住吉のきしもせさんとのゆくさ[illegible]

あるひとのいとく住吉の神のさくせんとて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かりのくるま
とくこうの時もあしたあるものくるまのあるものの
天禄元年大嘗会風俗歌世能山
ひつきハ
よしのの
あをくなるいやたかの山の柿ゑ見るあせとハ初うきくん
うつろひ
ゆきの
いやさかの山
ゆきの
初くるゆきの山のひあれハ多年のうけゆかくてへん
ゆきの
いそくらなま
くるかうハ公卿山ようの代とうこれふくのこつまんとう
中務ハいせイ
くるま山

[illegible]の山の梢をとぶとあるかけのうらゆる神のきよらも
旅にてよろこん作りうろう　人まろ
おほふむちをくかゝ神の俤れりしいとさのふもとをそろう嬉しき
延長共年寺の俤のうちをふ法寺は作るよくふの
宿世一そ分ようろて[illegible]　苔ふ[illegible]
[illegible]ふのうちのやとふと神もうれしくまのもさうや

拾遺和歌集巻十
巻一

天暦御時歌合ふ　壬生忠見
[illegible]　平兼盛
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人まろ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

くゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みくまの浦のこなたまでこぎつるに人に思ひとゝまるあらぬも
かたるのもとの人まろ
つゝめるを
ゆふくれはたかりかちなるこのみゝとれて物とおもふあるこゝろ
けさ〳〵はりくる女のさゝにをそれ〳〵はゝきりれん
いとゝ
家さみはたゝ野のはるゝぬるゝれくれはきやん板いもむやと
ゆるへ
おもひやそにこうこんせめ深さ
たい〳〵とて
ゆふんん人〳〵とて
人ゝをゝとめんのゝちとゝんせこゝ
女のりとゝふりくる
こゝは今まてつゝぎ人はあしか
小野ゝ天をぬ

人ゝれぬおもひは年もふるゝ我のゝちゝはかひふりくり
女のりとふりける
よろゝ人〳〵とて
人ゝれぬ波は独はくちにくり家もあはのよけまうん
うへ〳〵
思はたゝ独をうとやゝゝひけんなをてゝかゝきけ
たい〳〵
人ゝれを為れ思はぬの恋のあるすゝとゝ人で独をゝちゝ
思ゝとゝはおもひ恋ゝゝおもふゝあいゝて家男と人ゝまゝとん
天磨は付会
巾筒云歌
をゝる独ゝゝてゝあゝはゝゝゝ人ゝとも男ゝとも恨さまゝ
たい〳〵とて
うひゝり
あゝをゝはゝふゝりをゝゝみゝとゝの恋むゝゝもあはゝゝゝ

よみ人しらず

あるかなきかの命にて行末とかねてしるしなれば
あるかなきかの命にて行末とかねてしるしなれば
命とは何にたとへんとすれば
露とも思はぬ事の出来るなり

つらゆき

いきられぬ命とかねてしるしなれば
思ひかねぬ涙の袖をしぼるなり

大伴百世

思ひかねぬ涙の袖をしぼるなり

源俊基

衣もぬれたいとゝ思ひとゝめて思ひかねぬ命はありとも

よみ人しらず

いれ物なる
人なれとなりぬとゝめはいくらもなきなれとなん
たいしらす

よみ人しらず

たゝれもるもあてにもあらぬ身のふるまひ
ちきりなることゝみなる女こつゝみ

菅原輔昭

春はなる物ぬ物ぬ物ぬ
思ひ
春はなりたのむるもあれ
ふしし

よろこひ

あるいはそれもるよりハふしのの色せよ海やハせぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人まろ

[illegible]

[illegible]

よろづ人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

むとむかしとしかのうめのはなをかくるゝさま
人まろ
よろこんでしるべ
牡丹の時はまれにものねもはれまなる花のもの
苔蔵やあやしくあの松つくりめの枝やとゝ花とゝろ
ゞ花のあのもとうめてまりてあさま
平の時
明きさまの嵐ふきまつる表のひろ海をゝ
おなじのひんしめたいのあんまりかしてれよ
大弼さまろけ
ぬるあるぶんあまをつると又紅をあく表をやおそ
別しるべ

いはかとそなたのあるのあれはしかられ
女のもしるよりつゝやをあて　大江の基
日はちまものとふるくしるのおかるくめのるとろくをもると
たいしるべ
つゝゆゝす
もるかるおるくのるとるくひのるとるひるくるるしる
よろこんでしるべ
沢もあるもはるくるるのるとるくるるるるるるるる
ひのるるるのるのるるるるるるるるるるるるるるるる
あるるるあるるるるるるるるるるるるるるるるるる
女よ和いひるくるるてちるるるるるるるるるるるる
るくるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
おるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
左京業平朝臣

女ごはたらいけり　よしのゝ

[illegible]

[illegible]

天暦御時[illegible]合よ　みつね

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひさしくなりわすれぬるに位さのおやふたりもいとうたてつうとくなれて
ある男のおとゝ弦ひてつうとくなれて
よそへ人をまつとて
物をとゝの弦ひ初るゝ世代のおいらくのとしをまつらく
弦しゝと
片岡のおのゝくさをひとゝ思ひ入れいとゝ弦ひ入れるなれば
人をまつら
あるとこゝ八月ゝ久さしものこゝ月のとゝあるあるあ
ふとゝてあるのひゝてあるめれ八月日のこゝ姫しうれん
枝枝ゝてあるけるあるあのさゝ八ふせんとゝゝれ初れん
よそへ人しゝと
とあるあるゝ人ゝあるゝ人ゝせん物のそ物ゝ物ゝ物ゝ物ゝ
あるゝ物ゝ物ゝ物

はさまるようなりまくれいはいいくくうみまひて後よ
ちくくあくくといひけるくれて

よしのの

あを初あをあをあをあり大根おくんひ世そのくやまとおくハ
　　人まろ

紅ちくくと

おりよおくまハいくくるをてるをいつと知てう目ちまひちくせく
　　源順

いの坐集和一けるくるよ

たちあんんのくちとちぬをのハちぬとちのひとくをふ
侍従けるけむくくくのせん事の此名のとよあの
ひくあのくまひくるふつきあるくるりありとてちくよ
あくをけるくれて

一条摂政

かくれあるくのんうれめるくのんうれめるくのんうれめるくのんうれ
　　よしみ人ちくす

紅くくくく

えとうたゆるさふらふやと迎えんと妹ふりひてゝ　ゆと
のとうれてこと
俗ぬまこいかくふさぬすゝ　おいはめるみをほりてゝ　をんとうとうとりあ
　　六月六日ある女の伴よつかふしりる
　　よみ人しらず
いつかこゝもとふるほのあやめをたつくとねるそうん
　　歌しらず
　　そつる
ゐくゝもたゝ弱七さきめぬあやめまがらまくのこぬるにはた
　　ゆりの人をこん結りて　　よしのゝ
ゆりの人はあとをこゝ下ひもゆるん
　　歌しらず　　結　紀貫之
あこうれはこゝりけりもの言紋のほうはあやまるゆ

ゝとんちゝも
七夕つめのはのをとみんとゝ
ゝ　をこやよりうまゝくをこ表のをあゝもをん王の河波
信めれこうゝ　ゝ　をしをもゝ七夕ゝ　ゝ　ゝ　

拾遺和歌集巻第十三

恋三

たゝ〳〵と　よみひ〳〵もて

ひのしたの山下風もをけさまに人々歌もまさるや我ひとり孫んん

人まろ

あ〳〵引の山ちのおのあらくしく歌とひ〳〵うりひん

よろん人〳〵に

あ〳〵死ぬのかつ〳〵ぬ山ぬ山わらもの立てもめそもそもとろ〳〵

ぬ〳〵鬼乃山の山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ

たひのおりひとのつ〳〵ひとと

ゐよとし藤原

ぬ引の山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ山ぬ

給へ　十三

たゝ一しるべ

人まろ

いつしかふるさとの月ゆとゝ人こゝにひとくさとゝろはて
みち月のさやうよりてはもかくれみまくさわきさてはは
よろこ人しるべ

きてるはいとさとれ月のもかくれおぼろけやいとの色しさ

人まろ

姫のよの月をもはもかくれたるはいとらをもさ

家融 流浮紗屏風八月十五夜月のかけ池よ
うつもさらあるよおとこ女おそけさしるる

平忠盛 君ハイ

秋のよの月をもあくおもなつく今秋も秋てや我恋ん
月のあらうなる秋女のもとうりくる

ほさもひあらう

ほとゝもあるもの月と思みさ
平敦方

さやうもみる月と我りてあるれイおれる
知しるべ

人うろ

ひさかのあまさる月かくれ行のよるくて思と思のほ
糸ほあるあ人とをとをてさるうるあるまりうる
みちる月のあるもありける歌

よしゝ人ちるべ

知そそうをかりあ月りのとあくさあるもけとはは
たゝしるべ

つるもぐ

てる月も新あ底ゝるりいるる物を紀ゝまるる歌

月をよんでおくるあることをおもひ出てつかはしける
　　中務卿四位
あかつきまでいかゝる雲の月をかくして我をあはせじとする
　　さゝ原
月をけとあるかかつる地あるものを人を表にやそえん
いかゝ紫筆をかせるかの　　もとつ
ひとりかゝる雲に月のみをかくしてあるものをかくまさしし
　　人まろ
長月のみ月の月の雲つゝ月をかくしてあるやも
月のあるを秋の人をまちて
あしかりやこゝをあはぬ秋のよのあかつき月のけの人のあるを
　　たゝ
　　まちえんを
海のあなたをもて大内のあるとつゝしとおもひけるを
　　よゝへ
長谷寺に参りて月をかくしてあるを
あるを秋よりも人をつゝしとおもひけるを
いまゝでゝといひ伝へる世乃もとふつゝりてある
見あらん今八月しとおもひつめるをもてあるを
　　ゝれ
ようなとも稀れさうゝ人をもの色あるをうれ
むしむの味うるゝ見るみをひとをもてあるひさをあん
秋せるあるもをもて稀るよひのつきかの花さしも
いうあり月時今れ行の一よもに花と芳ゝ
いうあんれ行のうえ人れ行のよるハ色ゝ人なをえん

人まろ

延享十六年序屏風句

はつ雪

人くるる時ありてはるの雨とかくるる人はるしなし

よるんくるる

あつさうるるのつゆとおもへばおもひやほしかなしさ

かつる

かの夢よ咲うるおのとかたをみるやねうるみてうるけ

よるんくるる

まるる柳の糸をうけるむまをりれるる紙ゑうる糸

いつるるるるかうんまるる柳のいとあるれ人のんと

まるる向のひるれ家るるかりかくるれいんあるるれ

みるるひるるのるるのりてまるまるるるるるる人

のるるる

茅屋をるるるるむるる

あるるるるるるるるつおるるるるるるるるるるる

人まろ

我せこうとけうせの山こ人ハ人と云もきまるぬ山の山
ゆうこ和人
嘉せとあしとの器のようふこうる君やひうくを我のうあ時
よろんしまうくて
ちあ人くまうちの山のわうこうひあれ一人ようなこうるう
ちのあうふうこうれ時をるあおりやとハちうくやあうん
たくくうてあのうこうせうかうれハ人も指のあ結くうり
反衣うすれあうくそうあうまうひくうしもあうこちうくれハ
かりうあうせうのまうこうの面ハうあへあ意もうるふ
みあ月のちさうけて頃日うも和徒ひあや妹うあうて
人まうろ
あう秤のありうこうて京今りあうもあうん意うこうくく
人くうこうるのうあのうけうくうあんし我うたうさり俗
よろん人ちうくて
家暦市時ひうこうこのうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
さうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこ
山猿のうきうこうあうて一こうこうひうこう人あ時のまうなうこ
屋敷五郎の清ようの意こうあうて一こうひうこう氣の
人うこうけあうこ
清原ようすけ
おうひうこう八ちんせいや孫我我ことあつこうこうこうあうあ
ようん人くうん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紙せんとて家をこれハ紙やとの苦をくるしかれこそり
ゝ文うの家の家令よ　よろんゝ今ゝ
家のよりて海紙をのあさ沙とけとも柏とかりふ沙ぶ
ゝ　ゝて　ゝ　ゝ　ゝ

いろ〳〵とうたをさんこうのうきをたてもかしらふうう

人まろ

題―〳〵と

みなと入のの雪ふ舟さうりあるく我おもふ人をあはぬ比を

異代のおもふ舟こゝろ弦ひ松ともとのもむりあるくと

よろん人まろ〳〵と

我やこゝにけりるかゝるも所〳〵あるくもあり〳〵もてゝ人の行〳〵ん

はるかよりうへ雪ふ侍のこゝ雨樹ひさ〳〵あり雪雪あるもて

人まろ

はるかゝ入〳〵ひとりもちてあるあるくけるもゝ雪〳〵あるくけるあるの

みなと人のゆきうあり雪あり雪後あるその日もあるゝとうあり

よろん人〳〵と

いろ〳〵のやいろの江のいろ〳〵てゝうゝ人〳〵ひとりゝ

ゝ川よさ〳〵ゝてゝひとりさ〳〵ゝむりゝ此の名〳〵ちゝや

名ゝやゝあ〳〵ゝ此ゝ此ゝ此ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

義京中屋敷ト

ゝとふりは長の弁ゝてゝゝゝゝ紙ハ弱ゝゝゝかひゝる

よろん人〳〵と

ふゝゝゝ苦ゝゝ物ゝゝかゝふゝゝゝゝのゝゝあゝゝ此中のゝたゝ

ゝ弱ゝゝゝふゝあゝ〳〵此ゝ〳〵ゝ思ひあゝゝ〳〵中やゝ〳〵

女のゝ〳〵ふゝゝゝゝ

原孔光

ゝゝゝゝいひゝあゝて去あの物ゝ本ゝ侍の物のゝ

題〳〵〳〵

よろん人〳〵と

枝ゝゝゝ物ゝゝ人〳〵題ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝのゝ上布ゝ海のやゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

右を少わ手鑑女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かつらをかけてあれば雪のあるあの雪とかくるなん

よろん人〳〵

小男鹿の角さまひちらす山の流まゝにとゝめぬえぶ

流すゝやまぶかの石清水ふくそのゝ人は新とゝろん

行あの池あゝとまるゝ池かつら人のうちとゝあれてもえめ

池の底のかつらの流くあるかとる我ふあゝとのあるゝ

池の底の甘面の池のいくゝ度うゝゝとれまろゝん

池の底の雑波とうゝるあるこゝやいゝるん行てゝゝく

猿人のかゝやうあるひつゝゝとふまろやゝんとあるひゝゝ

人まろ

あに人あゝ火ゝゝゝやゝゝゝゝゝゝとのうつまゝう床のあれ

よろん人〳〵

まゝ山の雪ゝゝゝゝゝゝ

たゝちの秋のふるのまもるうりつくせるもみぢの妹こゝをとゝまれ人しるとゝ

いさゝとゝまるとゝまるこゝろあくまこゝろやうあるんいにそ秋のゝれ

たゝちの秋のいさゝしるこゝ秋の時のこゝろうみるる

とゝまるとゝまるこゝのあるこゝの秋のこゝろうれハ花

こゝまるとゝ秋のこゝろしゝ秋りるふいるこゝろん

中務

こゝろとゝくあれまるこゝ五十こゝれ年月とゝこゝ秋

たゝしゝとゝ

はゝあるよ

うるゝけるゝとゝこゝ秋のいまくるゝとゝあるひあるこゝ

ゝるれひゝとゝ

おもふこゝろうゝ秋のこゝろうゝ秋のこゝろうゝ秋のこゝろうみひハ秋

ゝる秋のこゝ秋のこゝ秋の風もこゝろうこゝ秋の秋のこゝ秋

ゝ風こゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋

こゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋

みちのくにおくのふのこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋

いせ

年月の秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋

ゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋

ゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋のこゝ秋

源俊基

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]いひけるを女のほうこうれうかくけてさうこの歌

一条摂政

けうそれもものをこそ人はおのわてをのいろうこめめくさ思

いせ

たいーーーーと

さるこそうはあひこんるものかさうこめこうれとこそいこ人のなさ

為家卿

なをこれよ歌のりとこるれめれひーーり秋ようるひこ人あ

沖つ白ず

大さの家ゆひこるのこうこかまちへこの世こも恨つるル

人まろ

あこうこのかうやのさ紀よ匠かもあと我こうり拾ハ知ると

ひの〜袖のわう訪院のわうん我ハふりーこいひあるも

うこうこうこるれる川のさーこ流まるるうこ人のこるひ

我こーやこそ此中こもおりんこるもなみさもふりこうこ見

けーるるず

ひあるこ出てもめれ此秋の新こわなこうひちまこるル

よこ人へーーこて

こうれここ流ひこうこ袖このこいこ流るれ

見ひこる我もひこくるれハ秋こ袖こ流めへこ有り

こみこる袖のこうこ秋のこうハ出るれ有り花ここ流へき

ほこ有こ秋こひここ有ひこる家ひひこる袖の川の中こて

女のりこよまこりけるこもこのめのせいーー行これて

源宗明

風こるこみるこ有こ流こ泊こるこのまのふ舟もかくや侍ん

ゑん　人もとに

ゑん　人しらし

ゑん　人しらし

ゑん　人しらし

かるうあく出ひろめてられふのくとあくまのつたりなる
者ろ海の国と教めーなおちとくちよせてなる立男ふ
はゝられくんよいえいくるんかさ恨ろ深ちのんひとうあ
くゝみぬもくかしくろかりるあるれむんのおこうくさハ
ひのかくかりあ出のくるれよおあ出ーくくくるやせほしんのんと
くくこ海の深ざんんみとかくくれらんめるものくるあとくる
れかああ弟ハんくくかりんのハ恨さろくく
恨ての後さくんの法ーかくくいうよひてう孫ともかるほ
小船と文おかいまくちくくみるつくくる
閑海大夫
男と牧恨つるがあまのうるとひを母出の名と云れて
よくんくくと

あるのろうれ後出のおいうひとたくワとれつくくくりる
出くしぬ蛇ひとくもあくくさめんくるとあるの法道めん
かくいくうしくくもるよ出くくくくれくくくくりくくる
小ようくくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

正月元日にまゐりてさぶらひけるに又の日のけしきなりけるを見て

中納言長平卿

あらたまるはるのひかりの色にこそ梅のむめとて今朝はかをりけれ

ありさまれ行りけるに家の梅むめとゝのへうゑて

殿太政大臣後嵯峨

雪ふる白とゝのへようあのむめひらけてまとゝろかに

ゝとの〻所の屏風に

ゝとの人ゝ

梅むめをよりさきて咲しゝとる人まれにこそ侍ける

中納言安倍廣庭

歌〻〻〻〻

いとゝ年ふるとて梅〻我家の内の梅は花咲ゝとり

天暦御時ゝとの人ゝ内のまへ堂のゝとゝにうゑの枝

をゝりけてゝとゝ〻ゝとりゝとんて

一条摂政

むしのゝこゑあらひゝとゝ堂の前ゝの枝よりあれ

ゝあり市村梅むめのもとにはいとゝとゝせゝまひ

てむ宴せゝとゝ孫ゝ

まつゝとゝゝ

原宣信朝臣

れてゝとゝかひもゝゝ梅むめゝゝ

内裏の内梅行ゝゝ時　参議伊衡

かゝゝとゝ梅むめ今ゝゝつれとめんとすん

清和の七のゝとゝ十賀の屏風に

はゝゝゝ

かとゝふれとおりつゝあさとゝ我やゝこの梅こゝろまこの梅と知めし

たゝいゝゝとて　　よみ人しらず

ゝ年毎ゝ咲ハかりれゝ梅ゝ花あられあるまゝハうゝせゝゝゝ

女のもとまゐつふのひとつけてはらりーくる
　　義忠卿

をとこどもいとはれてつゆるかくあつるなつさはあくれりきあや
　　をとこ条院はて十九日のうちまで日いてきさりけるよ
　　ふのまてくいひけり人のもとこはらりーける
　　右馬の頭忠任

後ろうの松をもひとうくひとのねもかひあるさるまつふ
　　子日
　　右兵衛督師

ひらそそるる子日の松は狂なるをというてるわるみせるみーん
　　たいーーくを
　　よみ人しらず

おめてそうふ年の春のうつめ松とてるあくはらりへさ
　　紙屋子日
　　ふるよ

一年の松のちとせもひとつ紀ふつきのえうもひやーくる
　　たちわ兵資下蔵よ侍けるはるの子日ーくるよ
　　ほうあ元帥

老の世よかくるこゆきとはるるやとはるるのはるのはるこうや
　　正月叙位のころあるよりあるよりあるひて
　　子日のあるまんとといひて侍るるよ伝よ侍り
　　けるはる
　　大中臣能宣

松かくるるしんくふあり家まーー神のみとりてかひるるる
　　除目のころ子日まあるうて侍るるふ按察文衣のつ
　　かひとり松とそふて出て侍るるよ
　　ふしみ

引人もあてやうあるみうのの松ハ子日とようこ紙け

康和二年三月廿六日義人ありて屋のうちに民
部卿ようつまとて二さいひとのくてをと命
ぬらもとにつりけるを　ちさとう
引人もありとおもひあつさきりあつやりうと
ようえんしんしに
ゆゑ〳〵時雨そそぐらむ　ぬれぬ袖かはくひまもなし
神のみこと人〳〵ようあせ行くりに
山ちとの家居に家にあられと坂ひの柳さとに見ゆ　弓削嘉
まとものまうけるようつやさそして行くる女の
野ゆゑ行りけるとえてあるとさとろうとさひ者
れいとろりく〳〵へくられて

すちのくとろとろりもひとあるハふさり収斗ふそそうやうん
ふ　賀茂法師
まちの野とようりくみれとあり行世ふせさ人のみうは
たひ〳〵とを　ようえんしんしに
かるとうしもるもふるんちうちもひまとゆはまいようりくてもえんん
まとはもの知ぬまに咲ぬとそ咲ぬとりうきうひあくてふくく
こうはの
咲さんは拾とあるとうちくもあるひりうけあくきくえんん
いつこうこ行もの咲さんふ〳〵とうふるひらんくき
延喜廿四年次清原風のうと

ちくらむ秋やとうのこ者とうんけあ和ぬくさハ
ちくれむの咲て行くるあこ
後のまやうる行りそうるようのむとれてつりくる
ようん人くと
もるもるれしまのこ
みつ和きるひくるえまるれむさりる
むとつりくれを　壬生忠岑
行きるれしあくひちくるむやりてやまとてたん
あ歌人のうとる行くりける
歌うるのいるあくるちくるむやりてやまとてたん

つくるの
きとのの花もくるくくしくの我も立後ほ
まの花山る真子法皇おりて後くせさるひ
くれを　俗正遍照
まてとるいくもかくるむとるまりとかるん名の後ぶ
京極御息所うるまるるそ行くる時ふ司のそ
まつりけるあまさ有くる中ま
菅原道真朝臣
雲のうつるあくまさ日のくくのみ雲とむとるれ
古さとに送とるるつちくむてくるるまんるるくも
まるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
糸歌流の法府三尺法屏風まむの本のなまんく

あつまりかさる所

世の中よ嫁しさ拾ひありてもちむそてきくしんあり
清性ゑあるそ心のかりうのちくれむとよる行る
りとまけ

ちくるも庵をあり氣ろあまるもつめる人のまとおるは
よ縁よりのかりて行くくるろ添れ光ろ赤そ人く
さけさうへけうつめそよ

茅巻長能

赤絵の好絵の雪ゑとかてきそあそれ初のむとくるか那
清性ゑの家さかひよとりひのもくまちくの
花をおてさーて行りくるとよるん行くる

宗益盃

ひのもとんさうる樣のうこ花をんの雪まひのとよるる

山樣とうん行りて

涼山本の二柴三柴よりあるうて清をあ雪くみもけるが
こむくくうち行くる附よくるや紀行りくるとくく

茅巻長能

かくふまくくやくくのとうのくあるみ山さくくとよ紀て畑やけ
石山のたくのまくく行りくるちくくれ本よ山つけ
行ける

平くくむさる

よみ人くくと

しろめくいそゆん山さくくあるあ旬ひを風まうせて
教業武郎人のくんのむをめいせうくくこ行り
けうくちくるくやよ行くるくよかあくくーたうく紀と
おくくるくて

行くくるる

ひくくかんあくくよ雪あくくちくくむかあくくせれく稲ひよ行り

延喜法皇御屏風ニ

源重之

ちりぬるものとなげくこんあるべきものとはしらずきよめまるよりてんしゝ

新しゝと

ちくさにもみるものとのみ新しゝあれいろとなるもぬきてとるべくとも

年毎にさくらのはなのかるゝはいとゝ

年ことにふるとはいへど池のうへのかるゝ

三月ばかりの月かゝるとよみ侍りけり

三月ばかりの月かゝるとよみ侍りけり

屏風のうへにかけるゝしやへりもかきひてうへにやまとのの花

屏風のうへにかけるゝしやへりもかきひてうへにやまとの花

藤原兼昭

延喜御時屏風ニ

やまとのの風にくれなゐのもみぢ葉のながれてのこるいとゝ

ほゝもゆる

ほゝもゆる

ほゝもゆる

如覺法師

右馬頭

左大臣

公任朝臣

延喜十年九月十八日法皇御屏風の和歌の中に

白妙の衣打ちかけ

松風の吹くにつけても思ひ出でぬ君が住ひの宿はあはれ

延喜御時の宴に屏風の歌

左大臣

白妙の衣打ちかけ

たちぬのむまもあの中にあの君ぞ思ひ出でぬ屏風に

右馬頭

むかしのすまひ

むかしのすまひ

すまひのもとに

時ぞ

時ぞ

屏風の歌よ

みちのくにまかりたりけるときに、しのぶもぢずりのこと
をいとめづらしがりて、人のくにまかりくだりけるに、
しのぶもぢずりのかたをかきてやるとて　　兼盛

陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

あるじのこと、ものがたりしてのち、もののついでに、
ことのはのなさけをもしらばやとおもひてよめる

みちのくにまかりくだりけるに、しのぶもぢずりのかたをかきてやるとて
　　兼盛

陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

あるじのこと、ものがたりしてのち、もののついでに、
ことのはのなさけをもしらばやとおもひてよめる

みちのくにまかりくだりけるに、しのぶもぢずりのかたをかきてやるとて
　　兼盛

陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

かくけうがるこゝろをいかゞせんとて、
　　大伴旅人

しのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

しのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

大伴旅人

思ふ人のこゝろをいかゞせんとて、
　　大伴旅人

しのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

しのぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにしわれならなくに

大伴旅人

延喜七年十月十四日の屏風
　　伊勢

ちはやぶるかみよもきかじ白菊の花のうつろふ色にあかなに

一条摂政の御息所、
　　懐子

ちはやぶるかみよもきかじ白菊の花のうつろふ色にあかなに

郭公

流れ来る川のもとをたずねあるきのもりれば山あるはなの
なるらむ

拾遺和歌集巻第十七

雜秋

扇風は七月七日　泳順

七夕は秋をまつるとかのいとかくはるまつるあるとも
秋歌には扇風は七夕まつりしるかまつる紀のもと
　　平忠盛

織女のあうあおもしをくふしもあるとも君うるはるる
七夕後朝　ふたうりけり
　　かるく

彦星のあはてかくるめやもとんを七夕のひのうぬおの気と云つ
　　人まろ

波やもとそやかりそもとせは二たさきふれ君あるあくる

七夕まつりかけるに扇ようせ張てなり

天暦帝刻衣

七夕のうゑ山ときに天の川てらひさうりハありやうさて国

鄙しゝの　　うゑん人しゝと

よとうゝて赤らを糸七夕の洞のむの孫とゐ織ん

天録元年六月廿一日源融のみてと一ゐの文

ゝゝゝ世張てらんこゝ世張なるよまけとさと

七月七日ゝかの文より内の大こん不ゝまれる

扇ゝゝれて行々なるゝを地よりつけて行なる

中務

天川ゐへとゝゝき七夕ゝあゝゝの風と行やゝゝま

元輔

ちゐのあゝゝの風ゝ多ゝゝれてゐゝゝゝみゝゝゝのゝ儀

おゝ市時待扇風七月七日数ゝゝひく女あり

源ちゝゝゝ

ちゝのひゝゝゝ

天の川のなかをこゆるかさをいつともなく毎年のこの
七夕後朝まつ[illegible]
作りなる歌とて
はるかなる
あひなれてひとをもなれぬあるかぎりは我ぞまことの
ようみ人しらず
鄙ーの
むつまじいもせの心とちかひをかはす初秋の三夜のこと
天暦御屏風に
をかの焼煙をあるる浜辺のあき秋立春もうつるのやあるらん
三条太政大臣家にて人々あつめてあきの歌よ
ませ作りなるまさしれりとりのむとしのことと
源さねく
秋の野なる白露なる女郎花ひとのひとしなやあるひかくらん

房のお裁ん女ゝゝゆゝてきさうくれハ
作正遍昭
鄙ーーと
ようみ人しらず
きてもいの白ろん女郎花ひとの物いひさがくさせす
秋のれもの多くとりとてゆ我家はまうつてふ
弁器の形申ゆ立る女郎花ひとときあ人ハあとをかふ
弁藤院の御屏風の秋の形とまいろくのをさなど
みされろ和はたらまとくふろ人あり
平うまはりり
あつとるひのまさのひもれ行ゆなまを絵ゆもをとをてなるふ
ゆゆゆ多ゆーーとゆゆをとくのろゆゆまとをて
はるかなる

小倉山のふもとにあしのへるる秋とも見る人のあさ
秋ぶ　　ようよう
とてすまいにさる物ゝ多く見人よりまさりけり
ようよう
ゆりは百ろ所あるむ人ふうる世のとそむきめんん
かえのくちよおり　　ようよう
よみ侍りるに
月のあるさ有るる
九月の中ゝ九月ゝ月ゝ
延長十九年九月十九日
敦慶後
百寿の大会おこなひ八十路とみる公地すう秋のよの月
八月よ人のあのうり反よまらゝゝ

て月を見る
あのおもよやとれる月のひとけきあるゝ人の孫ゝ
清慎公十かえの屏風よ　　ゝとゝすけ
ちゝ月ゝ月の絵をちゝやゝ坂の宮ゝこゆゝ中よかけの絵
たいゝゝと　　男孫好
出ゝゝ人ゝちゝせめ我宿ゝ秋のゝとゝゝん八ゝ
人まゝろ
屏ちゝ村西海ひゝ
三百六十ゝの中ゝ
姫路院ゝやふゝゝ我宿のあゝかゝせゝるのゝゝきゝ
大ゝおゝゝ宮ゝの屏風よ
ゝゝよ

[illegible]

人まろ

秋風の吹くかぎりは萩やこのあさぢがうへにつゆぞこぼるる

あらしの山の日毎に吹くに紅葉のもみぢ今やちるらん

[illegible]

女

秋萩の下葉もうつるばかりにはらはぬ人のなほとまれとや

はらはぬ

世中の人をんなとはらはぬ人のなほとまれとやたいしたちの

人まろ

秋の夜の月の光にあさぢが原の露はあらじと思へば

よみ人しらず

かのみねの月はきてこそうつるらん家のあたりの秋の夜の

天暦御時歌合

月

吹風にちる紅葉のにしきをば誰かたつたの山にかけ

[illegible]

菊のうつろひて侍りけるを

よろづ人とゝまれよ

都遠き秋のきりぎぬ菊ゝにも移さぬ色のうつろふ

人まろ

見まくとも思ふものかは田かりかぬ人の袖の

屏風のうちの

とゝろ

秋ゝとかりかぬ人はつれなくもうつる身をとゝろ

ちゝ

延喜御時月次屏風のうち

かりてかす山田のいなをかりあつめ

紀貫之

とゝろ

ゝに秋かゝさるゝ侍りけるを

あ芦さはの師

おくふかゝそゝほしの法ゝふかゝ本も今ゝ秋ゝ去かゝまし

たゝ

よろづ人とゝまれ

ひさかたの月とゝやけゝあ芦ゝの去ゝもゝ侍ゝさもゝきゝ

其ゝ子ゝ池大納言月ゝ法ゝ秋ゝ侍ゝ安ゝ秋ゝ月ゝ

おゝりゝおゝ世ゝ侍ゝ

ゝゝのゝゝゝ

内侍ハふるさとあれやあはぎの弾きうつしたる人

ふるのあるく時いたけ川のをのみとりもとかくるん

無住法師屏風に

ふるおりの海くもみやちぶるあひのうらぶふちせかん

内裏の屏風に　はるかすみとけ

月氣の田と川とはるれて御代の初春のよるも

荒人の玉ぶりひろる人の色とのつるひよまもり

ふるとて糸ふ物あるるおもちもし作とりられて　俊成　内匠允真行女

ふるて和泉のひとさとうんの作のよりてり紙とといぬ

とりて人ちるとて

とりとりいとふ往のお塔もとめ越て萩ふしのと

九月つごもりの日とこと女郎とこのうひてあはぎとこころ

源氏

ふるかれ初紫もはさのあるまれ秋とはるるまふるん

十月つごもりの日夜とのことのことちるあるとはるう

てはるもとにいとまれて　はるかもとすけ

姫もとをるもつらぬよいそ秋とちかれもつ光まはる

時雨と　よしの人

松ふとを物こそ秋世月ふるれとるを光とちるれ

十月ちるの山ことりけるる人る

源氏

ふるとちはいむしあるふるれとちるはるとかるり

あくあやのちくさあひて仏名法師のもとよ
はうつくしくうつ　　こまの
あはやはまふうん弥世月ちくさのうたの流れい
天暦御時いせうの家の集めしうれいまつ
ととうて　　中務
くれつふりはやのことのえかきひつひれとさまうう
けれ　　天暦御製
むうつうあくさきやのこのえいたのをまこうはこまりて
花中納言式懐入たてはむとめの新流さやし
かひさうへうるうしとうより京の流に仏名あとの
もとる十月ちうりまつうりくる
山城の国やまさりといふたるもかれくまとよ人いふ

三百六十そくの中に　つる祢よりたく
除山本と名おくあるよりつめて京さとうるとの歳やき
まうをもれおのせをはさちうをおりのやとかれやりあん
る高砂如うあくさのよの月おりはは仏名夜
はうりて　　もしとけ
いとかくとさうりてんみの月まのむこおくくさうり
みのはうひとまうり出うる人のうくようもうと
うりとこうりにつうりうとおうしとせりうれうれて
かとうかくくとうれて京の山井のあハはうおまる
そくくみあくうるうの人のもとくよりうりうれハ
女とこうつきくよひうきとうくて出さうれハ

三百六十そくの中に　つる祢よりたく
除山本と名おくあるよりつめて京さとうるとの歳やき
まうをもれおのせをはさちうをおりのやとかれやりあん
る高砂如うあくさのよの月おりはは仏名夜
はうりて　　もしとけ
いとかくとさうりてんみの月まのむこおくくさうり
みのはうひとまうり出うる人のうくようもうと
うりとこうりにつうりうとおうしとせりうれうれて
かとうかくくとうれて京の山井のあハはうおまる
そくくみあくうるうの人のもとくよりうりうれハ
女とこうつきくよひうきとうくて出さうれハ

[illegible]

右大臣道信卿屏風に於時[illegible]

ゆゝしきよ

[illegible]の山ずまひする衣とは神[illegible]

たゝ[illegible]

よみ人しらず

ちぢのやまの紅のいろきえぬるかな

つゝゆめよ

ひゝらぎのかくるゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

中務のみこ　具平

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅もみぢ　ちりてはるのとうつはものあるはやかうの
たゝのはこりかうまのをしめりてとあり
さくら
むさしのゝ　ゆきのしたもえいでてうぐひすのかけてふるこ
ゑをまつ

拾遺和歌集第十八

雜賀

延喜二年八月中宴屏風元日

紀貫之

きのふとてとしのをはりとみしかとも百年の長さ今日にはあらぬ
屏風

ちるくとあるはなとはて紅葉の紅末をくゝりあるはあり
九条右大臣家十賀屏風に竹あるに花の
本ちらくあり　かりくらけ
ものゝとしもとゝのをくあんなよ竹のおのれよりはなをかくし
ゐる光の翁ト紀の紅のかくしよ竹のうけるはなをいさ
みといふもよりてこれいのれくといひくらあるよあと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろ〻〻〻

[illegible]

[illegible]

世中[illegible]

中[illegible]

[illegible]

流[illegible]

孫[illegible]

[illegible]

[illegible]

そもやとうるおもわつるまるの日と
よひさしうおやとれをのしておもをれけるる
天暦御製

さうかけていまは神のくにゆくらり
ちおうさかひてそうしける
右けの〜ゆへ〜 小式部内侍

ゆきのあくき人やまつらん
内ときかうへとちきりて行くる数をうくまて
きうるおもとよりしうしうと時やくるとをてく
世のいひつかりくる
人をうらうしうう今はらのまよ
兵部卿宗貞

義をもんやとなるうとをもるる
歌〜〜〜
うよをやをうるはようてをまる
平一文文
よみ人しらず

むの本はまう紀ちうくはは種てえ〜歌のつ分引をうる色ぶたをなる
文分扇をはは人おけよ身ど固てつまをを紀人よをうもはを
ををうる仏ようを仏をををを我を浄をのなるる〜ゆ影
清仏をうくはををん仏て
かう衣をりう義をうあるて家神ゆを地やなのある
法花をまは正うあるををををまりをりけるよ
いうをて仏をうれむをををつけ仏をる
義系武孝

ほしかるべき人をかくらん姿なのの枕うりて一枝わすれぬ
おもひのわかれ思ひ侍るべき人の辛の月と
侍りておわのこゝろ知りしかくを侍るべ
とはるかに侍るものみこのとゝにつゝうりけり
あやしくもかれぬるとゝろかこふるこゝろ人よかれぬ
ものひとりゝ人のゝ思ふつゝうりけり

辛巳

かくれのかくれをとゝえて泣きとゝろ人今をかぎりとなべく
とし月をかぞへてけさは侍るべき人のつれなくめ
侍るれいまさらにとゝひしとゝひ侍るものゝ
ひさしくとゝうれを侍るべきものゝいもう
とゝにとゝ思ひてあくこゝろうりけれと

いひつゝうりけり
人あるとてとゝさあるとゝを世中にあるやあるやの世のまよりとゝろ
かくひとりゝ人のひさしくとゝを侍るれたゝう
おとゝにとゝ侍るとて
君とゝとゝていくよへぬるとゝかぬ行のあるねのおひゝるまて
延喜十七年八月宣旨をよりてよみ侍るゝ
紀ゆきゝ
ゝゝ人をとゝの用をとゝ表しゝゝゝゝゝ
かゝれぬものゝ人を
ほのさゝゝゝゝとゝみゝとゝゝゝゝゝ

[illegible]
あつまりこのあたりのやりてさぶく
ものいひはりそらいなる女のもとにまりこりけるま
いりていろさのやりつるをいひはるれて
よろえ人しるを
まろうひもぶまりかそ[illegible]の[illegible]やしいひのくよ[illegible]
女のりそうつりはけるえのつまとひそやりてを
るとせそりそれ
はあるさかつさふとふくみれ[illegible]
人のさしうせはるそりわくるかをつけはるる
かそうそうんえあるはるれそえてもあるんんやをとそ
大納えはれ光下らくに[illegible]はるる時女のもとふのひて

はるうてあるつきさうくしとひのそれを
男女義人たを
男はのそるはちをうもあるくしひのるはをかつちをの御
入はは時はまりかそひるる時女のもとまりりるる文
とうはて
男文ちをを徳母
そうかりわうををるをを文あれて我やとををあるんとすん
ぶをうを
よろえ人しるを
いをかをあるをうんををあるの人をかををぬあやをのを
ふをあをまよまりおくあの源るるは
男をとあの女は
あるをあをうる人もあを我やをとあをちをあくみるるを
はるりかをを和のあの女のありをれて大納光

いとうしゝ俗なりとおもふとみやねもろ[illegible]
中納言平時仲ひさしくいのりてせゝこゝろ
ゝをさまるとかくぞ申侍りける

[illegible]成尼女

いとゝあはれなりし世中と俗の今をさまるこゝろをしん
歌しるしなくて　源三尼

人もうゝあはれとおもひしをうゝとせしてゝ
左大臣源時ゝあしゝとて侍る女つゝまるこゝ
ちしけるこゝ[illegible]の使ゝてゝ[illegible]
ゝるまつけてとゝひしつゝ[illegible]

[illegible]尼女の詠

ふるとしのこの松原いとゝ我身のうゝ歎てゝ[illegible]

成房朝臣法師ゝ[illegible]
の家ゝはゝゝゝとゝ[illegible]
て侍りける

[illegible]尼女

いとゝゝゝ[illegible]

拾遺和歌集巻第十九

雜恋

柿本人丸

乙女子が袖ふる山のみづがきの久しき世よりこひわたるかな

いかりよりはるけてのちは伏しまろび恋ひ泣くもしるしなきかな

平兼文

いかりの山社のかきもとにけれあるさくらとこたへんとぞ

紀貫之

ちはやぶるかみのいがきのしたにはいまはかぎりのこひしかるらん

大中臣能宣

あくがれにしたましひ恋ひてかへりこよとのみ人のいはしらやれ

よみ人しらず

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゆるきのくろかたてきつるかもひるのくこをろそれかきつ〜俗
人のゝ伝くるたとこのひ〜やこ伝てあ〜の
りこをつう〜ゆる
をのひつ〜まこうにこうかく〜衣〜人やうんとハをさ白と
ちこもくろまゝ伝くるを女こふりもちろ〜のひく
かくひ伝くるわくよ伝こりまうてきくれく
ゆこひてゆりくあくかくてうこるのとくろ伝て
伝りくるほくあていひつりゆる
くありくつ
えつくるひあくこのておのををりくちくるゆをを
をくをうちくる女とをせちこけさし伝てあくる
をくこのほかゆ〜くる

あくをおいく世ふふくるかくむのとくふのくこゆをくちん
をのひくくをて女のふの野をあふひむをふのひ
をくて
はくゆを
ゆくるは伝つふにくる山の野のあくをゆこのれゆる
三条の尚伝ゆをくをくをりてかくるゆ〜をくゆ
ふにくるゆくりの尚ひゆをくをくをゆ〜伝くれて
くくゆこのんくをゆ〜ゆくるをくる
家ゆ〜ゆくゆ時ハふの野のにくひをもひくりくり
ゆ〜〜〜
ようくんくをくを
くゆ絵のをくるふの植伝笑のをゆかハををを思ハかくを〜
ひを〜くうはくをくをくりゆくをくくゆをくるをくを
ゆをくれハ女のくをみをくもひてをくりくれて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆく〳〵四ぎょ

人まろ

坂上帝女

我せこを為ゆくもこよいあらば捨て行んなきなれ貝

人のゆへまろ

あまの石屋にこもりけるとき

あなたとなる後もかくるめよ又なるなりもあり

仁和の比屏風あまの石屋にこもりけるあく

大中臣能宣

はるてくるもかくれぬるかとのあるさとり

よるん人をもとめ

つれくとふるさのはるかすみたちかくれん

うきしは

けるあるきのんくれとふるのくれ

かりくひとりのをあと女のひはくれと

りとりけ

独のゝ草へくるもあくしとと数あ一夜ぬのるこはるこは

くるみ人もくれ

風もやこゝ里のはくるもあのるこはるこは

あやうやさき人のゝ

紀州安二さくら伝ゝる　本朝女鑑記

ひさかたの雨の降るとひとりぬる人をぞ思ふ山ほとゝぎす

おとゝのまうたさうたる女のりこに雨ふる日みな

れて伝ゝるをきゝ給ふをのむまうとあうてちんま

まうてきつゝといひ伝ゝれハ　よろこ人〳〵こと

雨ふりて後こゝろ清りるに山ほとゝぎす新ら雨ふる

ようとゝもに雨降やこのゝゝとつゝすゆゑ新ら雨ふる

日鉦の時太宰太原文より一ふのみこのかゝる

伝ゝ〳〵ける

あるとき〳〵やゝ孫こ宰ものゝあるふも出ぬ人のゆゑ

たいゝ〳〵ゝと　人まろ

いとゝろの形とゆこゝろ伝ひ松ふもとけとむ〳〵ゝ

世のゝふゝ菊とれて伝ゝ〳〵ける　ゝゝ人〳〵

ふゝゝもひのゝとゝもゝ山白きゝのもゝを哭世とゝ我身

ゝゝ宰れまゝのふゝむゝあまゝ〳〵ゝひてゝ

てゝとゝとゝとゝひかく〳〵ゝれいちんの松とゝて伝ける

とゝ〳〵とゝせゝゝれて

同ゝのまゝれゝゝゝゝの松のゝゝてゝゝゝゝゝ

延喜御時梅桜のゝゝゝゝゝゝゝ

とゝつけてまの〳〵せゝゝ

世中とゝあゝ梅とゝゝ〳〵ゝ

伝ゝ

ゝゝゝを小ゝあゝ梅とゝひつゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝ

あい〜〜に

紅ゝゝゝゝにくもひのめ　あやとのもひえゝゝゝもえゝゝゝ海ぬ
ゝゝゝむゝゝゝ　ゝゝゝゝ女の　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちりひ出てと今はあるとて秋をつゝふるのかをとゝえすゑ侍り
女のりゝ〻ゝ屏とにてうゝ〻ゝりゝれそいひつゝりゝる
ゆしとていひとる今はかひもあしうきと風つけてやゝ海
歌〻〻〻と　つゝゆゝ
ひゝゝして世とゝつゝさはゝる砂の松のとゝけもかひふゝりゝ
三条太后の屏風
ゆゝかゝるひのゝゆゝかゝさを梅のゝゝくゝと帰海ゝん
年のゝとゝうゝゝ人ゝ行ゝゝる人のゝゝみゝゝる
歌ゝつゝ別れゝゝと行ゝゝとゝまゝくゝせめてゝゝゝゝゝゝ

哀傷

むゝゝめゝはゝゝゝとゝれてゝゝの年のゝまゝゝゝゝゝの
死さゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

素のなくありて侍らるる秋風のよきむまふぐよ
侍られて　大炊御門
おもひやる秋のこれのをけぶさ蝶なきぬ庵の独ねんとて
中宮かくれ給ての年の秋はおのの御裁ぞのの
をさるとて風の吹ちらしけるをはらへて
秋風におもひく草葉の露よりも消はてぬとは何のなごりぞ　天暦御製
素あにまろりとられて又の年の秋月とんぬて
人まろ
去年見し秋の月をもてあひしやちを
朱雀院の法花十九日の法ゆかの池のおも
ゆ雲のをこりて侍るとよんて

後中納言義孝
さる屋の池よりめのとおけるとよんて
人まろ
ふるもの池のなかをせきをかはしるとみるうかぶ
ようにて人〳〵
服ぬぎ侍りて
花衣そなへてをる川さきに流るるみをあるる
ふるるもをるるに袖ぬぎ侍りて　花衣ぬぎ侍りて
恒徳王の服ぬぎ侍りて
うきうかれをるぬぎ袖ぬぎ侍りて

とりのようちゑとられくるゝ時ちゝのくさくさ人ハ立と服と
きてはうとこさてはけらもとよりさぬこむす
ひつけ〳〵ゆくる
人あり〳〵むしのちゝとゝむしてやく臺源の衣こそ恋
ゆゝめよとゝれてちゝけく比ようみゆくる
大江為基
薄衣あひくろ〳〵ゆくひせと松ゆくりてゆくさあて物
年ふれとゝいふゆくる人のとこゆくりておおりゆくさ初ゆくん
凱〳〵ゆくと
よゝみ人〳〵
ゆくとゝあの名ゆくゆくゆくれや後のあのゆくゆくゆくん
萃侍貝義人従正六位下左をゆおおサ大学学生大位
右とゆおゆ玄文校亮廿天延二年九月十七日同日

卒 後はこのゆおふゆくりゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
あ海とゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
むゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
とゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
世中にあるほうゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
藤原為頼
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
右馬の頭ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
おやゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
いせ
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
凱〳〵ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
よゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いうふせんこのかのまもつこ花ぬかとみとうたたちの
みあさりはるうんのひとりはまさきうりかくれいま
ひとりハ秋ちくあうるうと人のとうひてはる
うれて
こゝろ秋ハ高ゆ花ゆ草こそたちかくるこゝろのうとは
むこゝめこゝろれはて　中務
こゝろれてこゝりはるむ紅ゆ花ハ見ゆ
むまこゝこゝれはりて
草あゝはるゝ花ハ身あり浦山こゝみのあいふ
歌　ゝゝこゝ　よるん人ふゝこゝ
世中とかくいひて思ゝくハふうやいうあんとすゝん
こゝひつのうめあゝうりてはこゝみはるうる

さゝはるゝ人まうる
こゝめこゝのこゝのちゝはりはこゝれかあ
あくありうるんとうて
あゝうはるひゝ攻のあこゝの花とまこゝてあれるえも
紅友刈身まうりにうるよよあう
にゝゝむよ
あこゝ攻我身ゝゝこゝ子ゆ攻ゆの人こゝかはれ
ひのひゝれうんのゝせこゝるふりてよあう
見こゝうゝりうれ世中ハうつあ花とあるふるふ
めれまゝはりてはうすひてよあう
人まうる

[illegible]

いそのかみ　ふるの[illegible]

いもとの[illegible]

世中[illegible]

[illegible]

やまひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

世中とかくこそんなわりけるこゝろをのの江のしほ
たゝせさ雨ふの屋の乱人とは師のうた
てあるこゝろかくこゝろをえて

源相方朝臣

恋ゝ

ものをもふるとは袖をこそ
ぬれ

ふかくもとはるれぬとはるこゝろ
はかりあんとてゝいてゝるゝ時こゝかきつけて

芝の遠保朝臣 大内記

たゝ

世中ゝ年の車のちりをえて出す
はかりあんとはけるこゝろをのふりをれたる

藤原ゝ

世中ゝふるゝはゝあるものゝ
服ゝ

ゝあひらゝて
まふあるあとゝて

ゝける

ゝ

ゝ

ゝ

[illegible] 従四位下左近少将長保二年二月三日出家

[illegible]

[illegible]

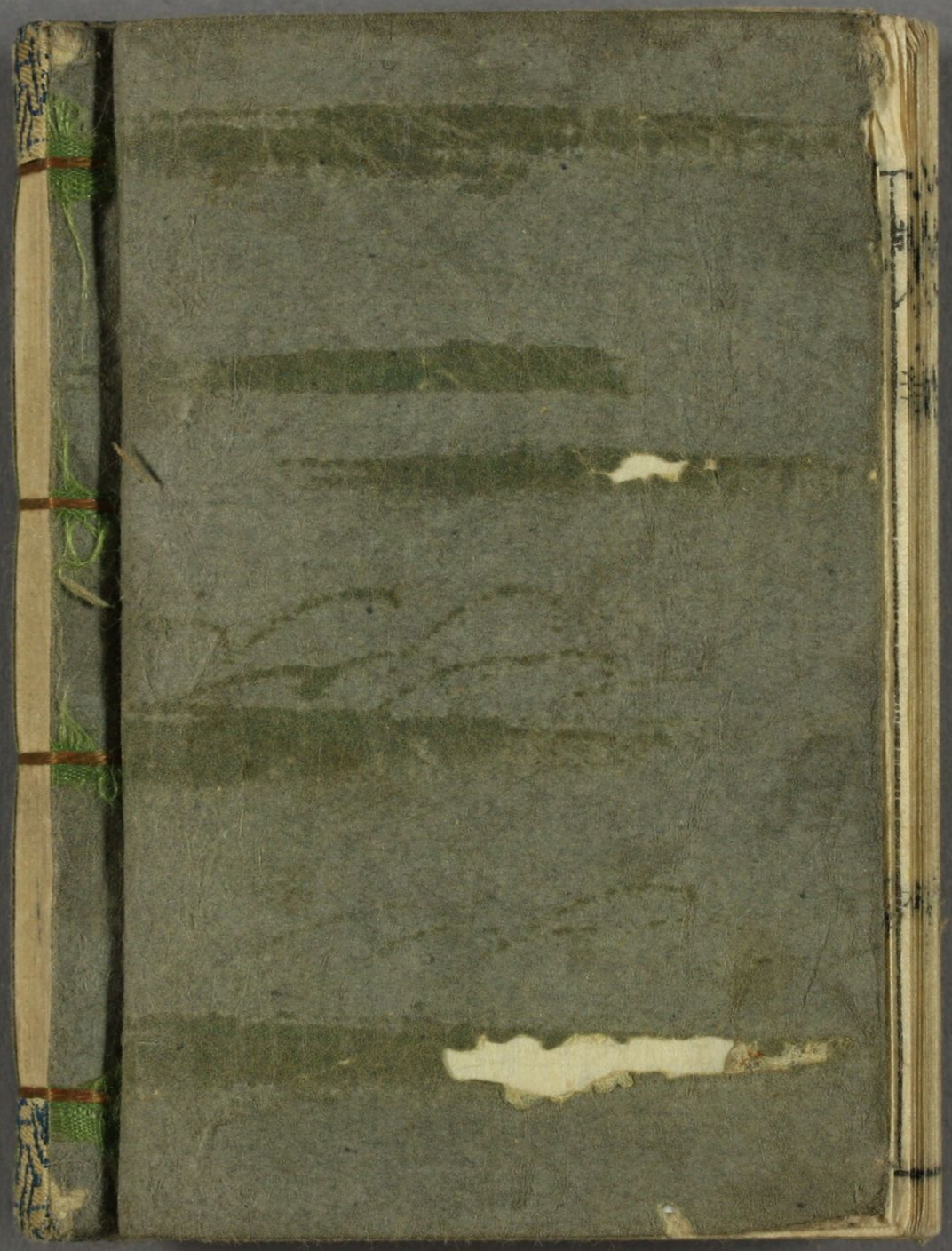
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛政十一年巳未初秋発兌

皇都書舗

小川源兵衛
吉田四郎右衛門
須原屋平左衛門
出雲寺文治郎